

た人数より多いのは、b, c, d, f, g, h, i, j, k, l, m, p, q, r, であり、反対に0以外の得点になる項目を選択した方が多いのは、a, e, n, o, である。

a は6-12歳の間の遊び友だちについてきいているものであり、男女の区別なく遊んだが多かった。

e は6-12歳の間の読書で、主人公に対する自己の投影についてきいているもので、「女の主人公になったように想像して読んだ」(2点)を選択したものは、極めて少なかったが、「時によって」「どちらにもなったことがない」を選択したものが多かった。

n, o は子どものころの夢についてきいているものであるが、どちらも、「そんな夢をいだいたことがない」の選択が多く、日本の高校生の実情に合わないものと思われる。

5. 今後の発展

以上、性的同一性尺度を実施するまでの経過をおって記述してきたが、標本数が少ないことや分析の不十分さなど今後の問題が多い。

今後は、更に多くの標本を求め、くわしく解析することと、実際に性的同一性に問題をもつ児童生徒に実施し、その有効性等について検討をすすめてみたい。